

稻荷山古墳確認調査の概要

—平成9・10年度—

西 口 正 純

1 はじめに

稻荷山古墳は、昭和12年に土取り工事で前方部が失われたが、昭和13年に「国指定史跡 埼玉古墳群」に指定された。その後、昭和43年に埋葬施設の発掘調査、昭和48年には周堀の確認調査が行われ、それに基づいて昭和51年に内堀の一部を復原して現在に至っている。

また、昭和53年に埋葬施設から出土した鉄劍に、金錯銘が発見されたことが、全国的に知られるようになってからは、多くの見学者が訪れている。しかし、現状の復原では見学者に墳丘と周堀の形について誤解を与える場合もある。また、堀の水による墳裾部分の浸食が著しく、古墳の保存状態も極めて悪い状態である。

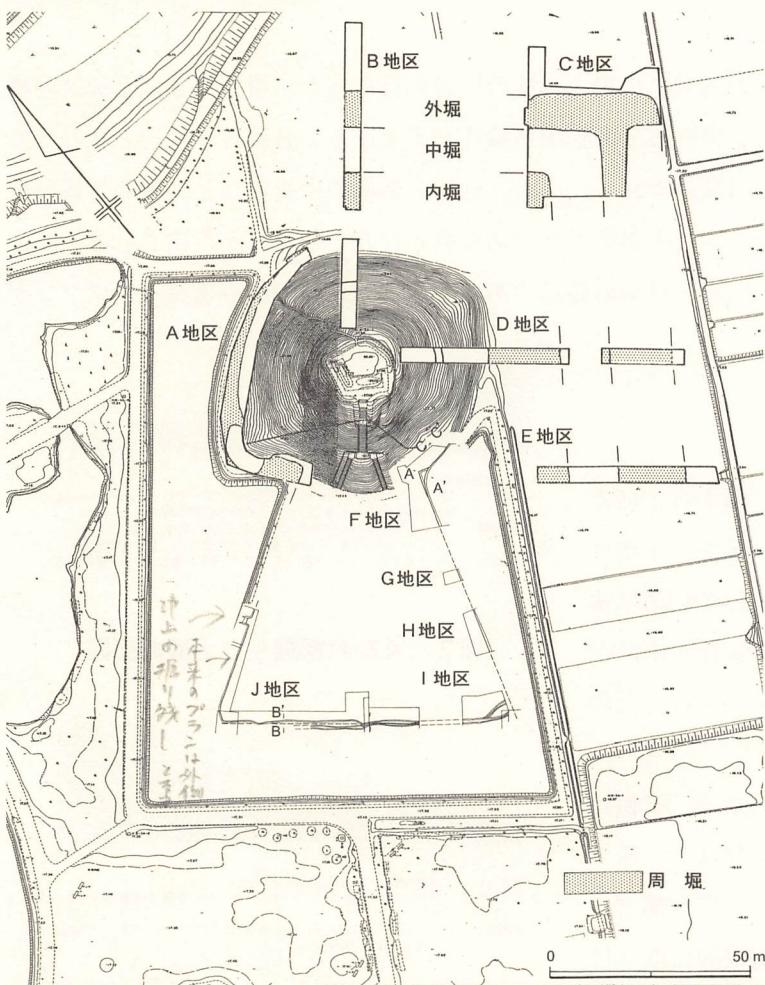


図1 平成9・10年度調査地点（概念図）

こうした状況を改善するため、前方部の復元を前提に後円部の修景と内・外堀の復元を視野に入れた保存整備事業を平成9年度から開始している。

この整備事業のうち確認調査は平成9年度から平成11年度にかけて行い、その後数年をかけて復原工事を行う計画になっている。また調査報告書の作成は事業の最終年度に予定している。事業の終了までにはまだ多少の期間が必要なため、今回平成9・10年度について、調査成果の概要報告と一部の出土土器について紹介するものである。

なお、平成9年度の発掘調査および、出土須恵器については、「調査研究報告第11号」に詳しく述べられている¹。

2 平成9年度調査概要

平成9年度の調査は、A地区からE地区の5地点で行った。A地区は後円部の墳裾部分と造出しの範囲確認調査である。後円部両側の墳裾部分は現況が園路となっており、範囲が不明であったが今回の調査で確認できた。ここからは円筒埴輪片のほか人物埴輪片と馬形埴輪片が出土している。造出し部の先端部分は確認していないが、側辺の位置が確認できた。くびれ部の立ち上り壁面には、掘削時についたと思われる工具の痕跡が残っていた。平成10年度に東側くびれ部で確認した掘り方の状況から考えて、掘削後ほどなくくびれ部造形のために埋め戻されたために残ったものと考えられる。この造出しとくびれ部間の内堀部分からは、円筒埴輪片、土師器坏・高坏とともに、須恵器の「有蓋脚付短頸壺」が出土し話題となった。

B地区は、後円部墳丘と墳丘北側の内堀、中堤、外堀にかけての範囲を確認した。後円部墳丘には中段に幅約2mの平坦面を持つことが確認された。出土遺物は、墳丘から人物埴輪片、馬形埴輪片、三環鈴の埴輪（部品）、内堀と外堀から円筒埴輪片が出土している。

C地区は、後円部北東の内堀、外堀コーナーの確認を行った。外堀はプランの確認を行なっただけで覆土の掘下げは行っていないが、内堀は調査範囲が狭いため確認のために覆土の調査を行った。その際に土師器坏・高坏などがまとまって出土した。今回紹介する資料は、その内堀コーナー部分から出土したものである。

D地区は、後円部墳丘と墳丘東側の内堀、中堤、外堀の確認を行なった。墳丘部分はB地区同様の平坦面が確認された。出土遺物は、墳丘部分で形象埴輪片が出土する。B地区的状況と合わせると墳丘には形象埴輪が存在していた可能性が高い。また、内堀・外堀の中堤寄りと外堀の外縁部分に埴輪が集中する傾向があることから中堤と外堀外側に埴輪列が存在したことが推定される。

E地区は、くびれ部東側の内堀、中堤、外堀の確認である。それぞれD地区の延長線上にプランが検出された。

3 平成10年度調査概要

平成10年度の調査は、東側くびれ部から、前方部の範囲を確認することを目的に、FからJ地区の5地点で行った。出土遺物は、各地区で円筒埴輪片が主に出土しているが、いずれも耕作土中や根切り溝からの出土で、埴輪の配置復原を行うためのデータに乏しかった。

F地区は、東側のくぶれ部分にある。昭和48年に調査が行われていたため出土遺物はごく僅かであったが、緩やかにカーブを描くくびれ部プランの内側に、前方部から後円部に直線的に取り付く掘り方部分があることが確認できた。掘り方部マウンド

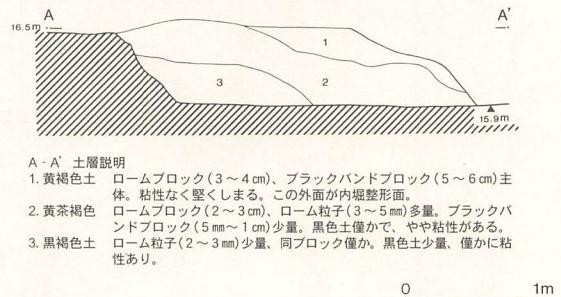


図2 くびれ部掘り方土層断面図

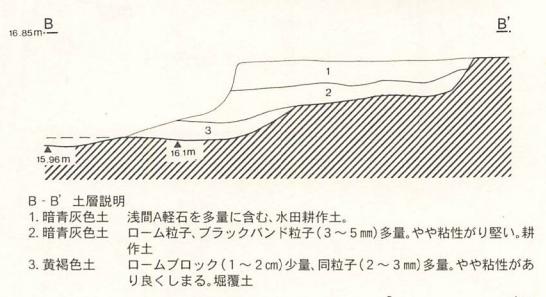


図3 前方部南側土層断面図

この上に
土と堅い足に
あり。

分の覆土は、ロームブロックを多量に含み、堅く固められた状態である。古墳完成時のくびれ部は、後円部から前方部にかけて緩やかにカーブ描き、堀の立ち上り部分の傾斜も緩やかである。掘り方部分からの出土遺物はない。堀底の標高は約15.9mである。

G・H地区は、前方部東側の墳裾部分にあたる。くびれ部分のプランの延長上に直線的に検出された。覆土の上面は前方部が削平された以後の水田耕作土で覆われており、掘りこみは確認面から深いところで約30cm弱である。覆土はロームブロックを多量に含み、埴輪片も含まれないことがら掘り方にあたると思われる。堀底の標高は、約16.1mである。

I地区は、前方部南東コーナーにあたる部分である。昭和48年の調査で検出されているが、今回の調査では、昭和51年の内堀復原時に失われたためか検出できなかった。遺構は、前方部先端に沿った溝と前方部に切りこんだ2条の溝状遺構が検出されている。その内の2号溝には、杭が打たれて



写真 1 東側くびれ部確認状況



写真 2 前方部南側確認状況

いたことから水路（用水路）として機能していたものであろう。いずれにしろコーナー部分は開墾されていたこととなる。出土遺物は、溝状遺構から円筒埴輪片が出土している。

J地区は、前方部南側の中心部分から西側コーナーと西側墳裾部分である。中心部分の幅約2mのトレンチと南西コーナー部分に昭和48年の調査箇所が確認できた。昭和51年に復原された内堀の現況から前方部内側約2m弱の範囲にプランが検出されたが、調査の結果内堀覆土はほとんど検出されず、I地区から伸びる2号溝と中心部分で重複する3号溝が検出された。さらに3号溝の前方部内側に向かって地山部分の削り込みが見られた。さらに一部溝状になる部分もあることから開墾による削り込みと、根切り溝などであることがわかる。

最終的に掘りあげたプランを見ると直線ではなく、大きく波を打った状態である。旧地籍図によれば前方部が存在した時期の内堀にあたる部分は水田や畑であったことがわかる²。このことから、前方部先端部分には多数の根切り溝が掘られたのは、耕作により前方部が削り込まれてきた結果であることがわかった。

一部で堀の掘り方が確認され、からうじて立ち上り部分を推定することができた。堀底の標高は16.1mである。

西側コーナー部から西側墳裾部分も前方部南側部分と同じく、耕作による墳裾部分の開墾が進み内堀覆土は検出できなかった。西側墳裾ラインの中ほどで地山の掘り残し部分が検出された、両側の削りこみの覆土は古墳時代の覆土ではないことからブリッジなどとは考えられないが、墳裾部分

本来のプランが少なくとも検出された地山より外側であることから、旧地籍図にある水路にあたると考えられる。出土遺物は円筒埴輪片が近世陶磁器片と混じって出土する。

後円部の一部で基本土層と墳丘盛土が確認できた。黄橙色のローム層上の5層は自然堆積土で、図中第5層の上面が古墳時代の地表面である。また、第1層から第4層は、墳丘構築土でロームブロックを多量に含む層と茶褐色土を基本とした層が互層になる。この基本土層を観察する限りにおいては、F A（群馬県榛名山二ツ岳の噴出火山灰）は確認できない。このことからF A降下以前に墳丘が構築されたものと推定される。

埼玉古墳群では、丸墓山古墳と二子山古墳でF Aが確認されている。丸墓山古墳は、墳丘下に締まった暗灰褐色土の旧表土が確認されているが、F Aはその旧表土上に1~3cmの厚さで帯状に堆積した状態で検出された³。

一方、二子山古墳では、堀底に堆積することが確認されている⁴。

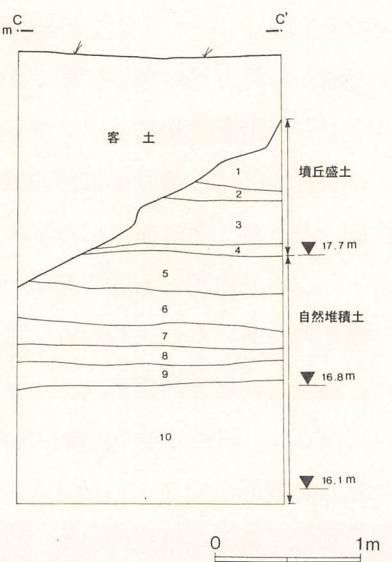


図4 基本土層図

C-C' 土層説明
1. 暗褐色土 白色微粒子少量、炭化粒子僅か。極めて堅くしまる。
2. ぶい黄褐色土 ロームブロック(2~3cm)多量、極めて堅くしまる。
3. ぶい褐色土 ローム粒子(2~3mm)少量、極めて堅くしまる。
4. 褐色土 ロームブロック(5mm~1cm)多量、同粒子(2~3mm) 少量、白色微粒子僅か、極めて堅くしまる。
5. 灰褐色土 茶褐色粒子(2~3mm)、ローム粒子(2~3mm)多量。 堅くしまる。
6. 褐色土 白色微粒子多量、堅くしまる。
7. ぶい赤褐色土 白色微粒子多量、ローム粒子(2~3mm)少量。堅くしまる。
8. 暗赤褐色土 白色微粒子少量、堅くしまる。
9. 暗赤褐色土 白色微粒子少量、赤褐色土粒子僅か。堅くしまる。
10. 黄褐色土 ローム

4 平成9年度出土土師器

ここで紹介する土器は、平成9年度調査で出土した資料で、C地区内堀コーナー部分からまとまって出土したものと、西側くびれ部から出土した資料である。

1・2は模倣壺である。1はA地区くびれ部出土である。口縁部が僅かに内湾気味に直立し、口

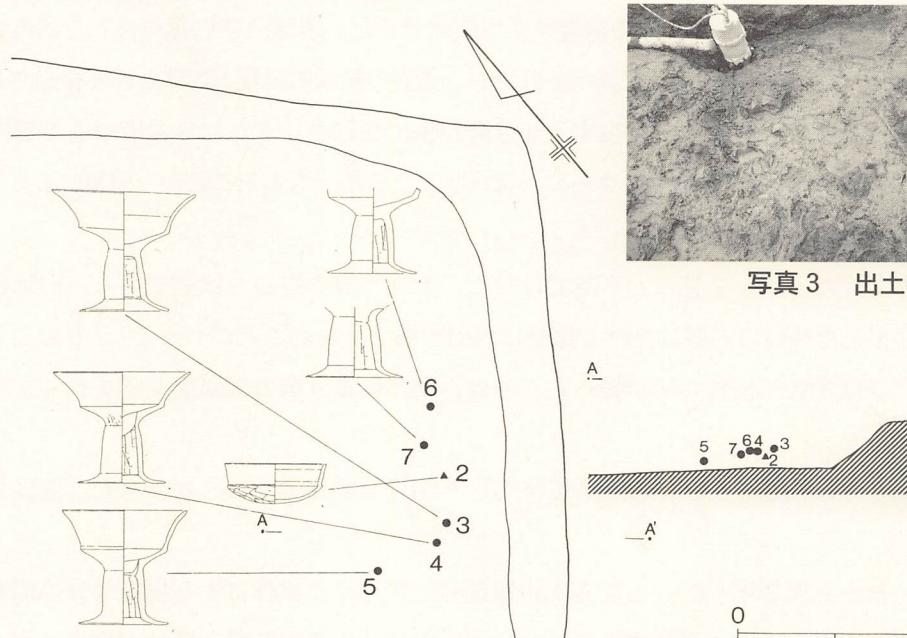


図5 C地区内堀遺物出土状態



写真3 出土状況

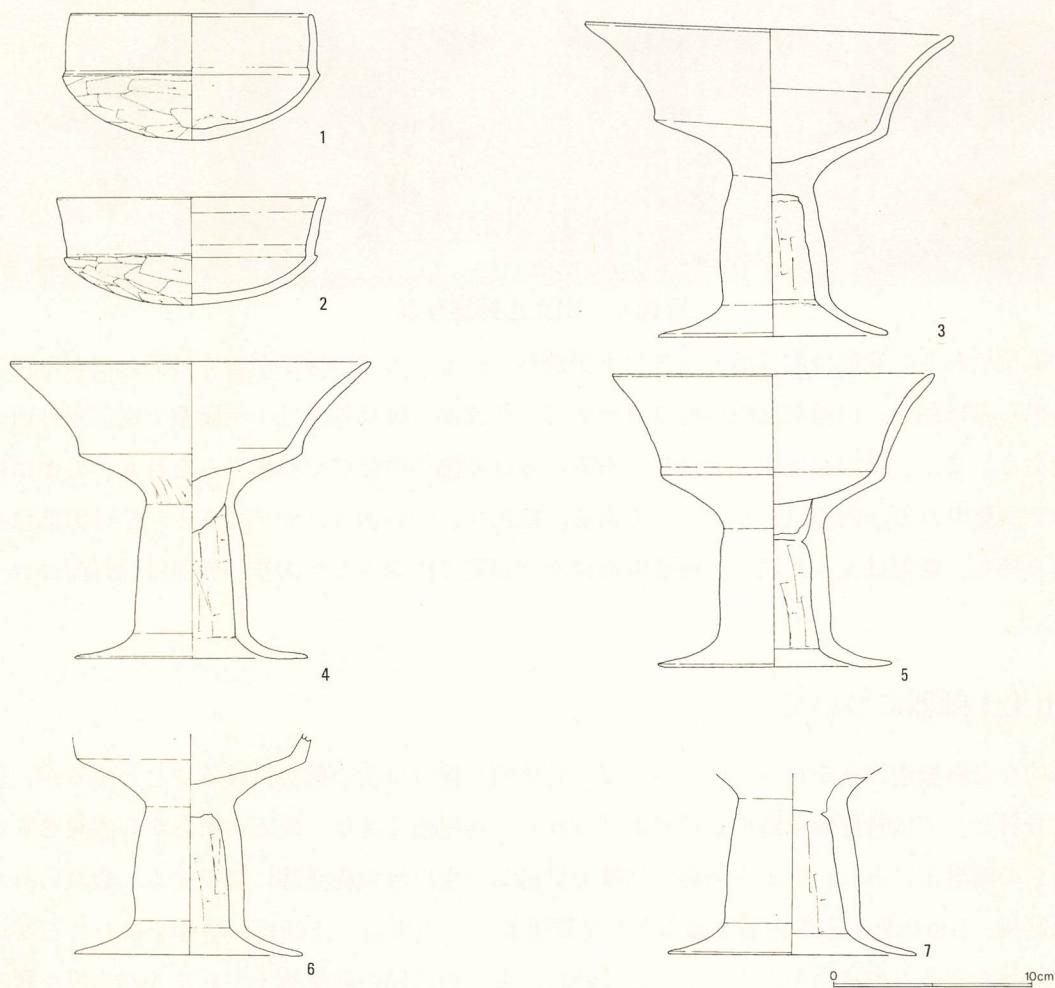


図6 出土土師器実測図

表1 出土土師器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	備 考
1	坏	12.8	6.2	—	赤褐色粒子、白色透明・黒色砂粒	橙色 2.5YR6/6	A地区 くびれ部
2	坏	13.1	5.2	—	赤褐色粒子、白色・黒色砂粒	赤褐色 10YR6/8	C地区 内堀
3	高坏	18.7	16.0	11.7	赤褐色粒子、白色・黒色砂粒	黄橙色 7.5YR7/8	C地区 内堀
4	高坏	17.7	14.5	11.4	赤褐色粒子、白色・黒色砂粒	橙色 2.5YR6/8	C地区 内堀
5	高坏	16.4	14.8	12.0	赤褐色粒子、白色・黒色砂粒	鈍い橙色 7.5 YR7/4	C地区 内堀
6	高坏	—	—	11.6	赤褐色粒子、白色・黒色砂粒	橙色 5 YR6/6	C地区 内堀
7	高坏	—	—	12.6	赤褐色粒子、白色透明・黒・白色砂粒	橙色 5 YR6/6	C地区 内堀

唇部は丸い深身の体部である。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ整形で木口状の痕跡が残る。2は口縁部が外傾して立ち上り、浅い体部である。口唇部上面に平坦面を持ち凹線が廻る。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ整形である。C地区、内堀出土である。

3から7は高坏である。3は口縁部が外湾しながら大きく開き、脚部はやや膨らみを持つ。口縁部内面上半から外面にかけてヨコナデ、脚部内面横方向にヘラケズリをおこなう。4は3に比べて口縁部の湾曲が弱いが大きく開き、脚部に僅かに膨らみを持つ。口縁部内面上半から外面上半はヨコナデである。体部外面はヘラケズリ後横方向にナデ調整している。脚部内面はヘラケズリ、外面

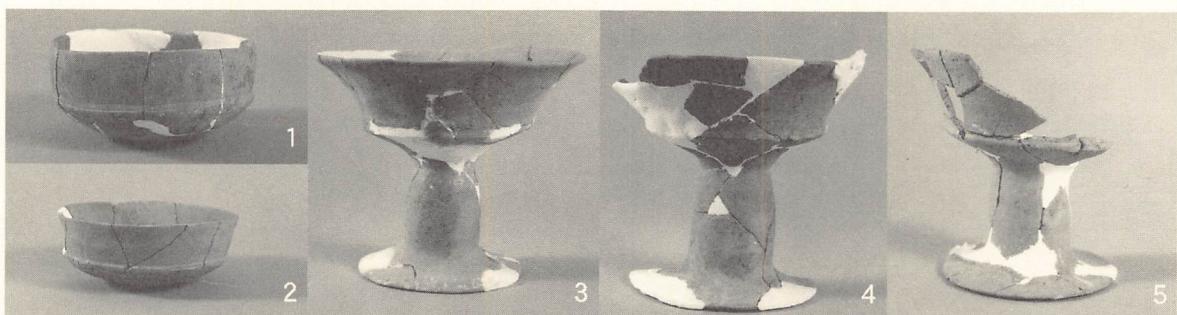


写真4 出出土師器写真

はナデ調整である。底部は内外面ともヨコナデ調整される。5は口縁部が緩く外湾しながら開き、脚部の膨らみは弱い。口縁部は内外面ヨコナデで、体部から脚部外面はナデ調整で底部内外面ヨコナデである。また、脚内面はヘラケズリである。6は脚部の中位がやや膨らみを持ち、外面は横方向にナデ調整される。内面はヘラケズリである。底部は、内外面ヨコナデである。7は脚部に緩い膨らみを持ち、底部は大きく開く。脚部外面はナデ調整で内面ヘラケズリ、底部は内外面ヨコナデである。

5 出出土師器について

全体的な資料整理作業を行っていないので、具体的な検討は次の機会に譲ることとするが、良好な比較資料としては新屋敷遺跡の資料があげられる。新屋敷遺跡は、埼玉古墳群から直線で6キロほど南東の鴻巣市にあり、埼玉古墳群に埴輪を供給した生出塚埴輪窯跡に隣接する。数次にわたる調査の結果、100基を超える古墳が調査されて周溝から、須恵器、土師器、埴輪をはじめ石製紡錘車、鉄製品など多くの遺物が出土している。特に、多くの古墳の周溝覆土からFAが良好な状態で検出されており、資料の年代比較をする上で重要な指標となる。

出土土器の分析を行った大谷氏は、この良好な状態で検出されたFAを基準に火山灰降下以前に築造された古墳とそれ以後の古墳に分けて、I～IV期に時期区分を行っている。そのなかで、I期をFA降下以前に築造された古墳とし、a・bの2期に細分している。この、Ia期について「稻荷山古墳の築造時期に近い5世紀後葉から末葉を中心とする時期に位置付けるのが妥当であろう」としている⁵。今後はこの位置付けもふまえ、平成11年度調査で得られた資料を含めて、検討をおこないたい。

本稿を草するにあたり、中村倉司氏、若松良一氏、田中正夫氏、大谷 徹氏、から御指導、御助言をいただいた。記して感謝いたします。

参考文献

- 1 宮 昌之 1998 「『資料紹介』稻荷山古墳出土の須恵器－平成9年度発掘資料－」 『調査研究報告 第11号』埼玉県立さきたま資料館
- 2 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稻荷山古墳』
- 3 田中 正夫 1989 「史跡埼玉古墳群保存修理報告書 丸墓山古墳保存修理事業の報告」 『調査研究報告 第2号』埼玉県立さきたま資料館
- 4 小川良祐館長の指導による
- 5 大谷 徹 1998 「新屋敷古墳群の様相」 『新屋敷遺跡D区』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第194集